The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『呂氏春秋』の天
Author(s)	髙田, 哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2013, 57, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58656
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　巨号（総五十七号）平成二十五年十二月　一九―四〇頁

『呂氏春秋』の天

高田哲太郎

はじめに

『漢書藝文志』雑家(注1)にある『呂氏春秋』は、呂不韋が当時六国で主流であった荀卿学派に対抗し、天地人に対応する天下統一論として編纂させた十二紀、八覽、六論から成る書である(注2)。その内容は「十二紀は―中略―管子の幼官篇の形式を真似てさらに工夫を加えたもの」で、「全体は儒を本として諸家を折衷したもの」とされる(注3)。この様な理解の下にその編集意図を探る研究はほぼ次の様に進展して来た。

赤塚忠は「十二紀を原論とし、八覽をその実践論とし、更に、六論を八覽の補備として、全書相待つて一の組織をなすもの」として十二紀を本と見做し、その統一的理念を太一一元論(注4)とする。これを踏まえ町田三郎は「「時令」を通じて多様な自然界や人間界の事象を統一づけようと試みた」のは「『管子』の形式に触発され」(注5)たものとし、管子の時令説との思想的関連性を強調する。更に浅野裕一は「「天人の分」を唱える荀子学派への対抗心」が原点だとし、天人の関係を核とする点を指摘する(注6)。

これら先行研究に拠れば、『呂氏春秋』では太一を核に天を存在の前提とする統一論が『管子』の影響下に展開している事が窺われる。即ち儒を本にするとは天を本にする事であり、十二紀とは天の分節であり、時令説は天の分節である時に順う事、天人の分は天との関係の認識だとするなら、『呂氏春秋』は天を統一論の前提にしていると考えられる。

そこで本論は天を分析し、太一を核とする天が無形の天から有形の天に現象し、天地万物を成立させ、更に人の内に天として備わり、その中の聖人としての天符を持つ己が天下に対し天子概念を生み出し、内なる天に従い外なる天に勝つという天の自己分節が統一論の前提である事を論ずる。そしてこの論の展開が『管子』の論を構成する道の自己分節、道が無形の道から形ある道として太陽となり、心となって現れ、最終的には方法或いは道路として実体の前まで上位語から下位語へと分節するという発想を利用したものである事を指摘し(注7)、更に『呂氏春秋』独自の立場として、その道の上に己を立て諸家の説を包摂した事が雑家に分類された理由であろう事を論ずる(注8)。

一、無形の天と有形の天

さて万物を成り立たせる天は無象無形とされるが、それは有形の現象からの推定である。

東海の極、水至りて反る。夏熱の下、化して寒と為る。故に曰く、天は無形、而して万物以て成る。至精にして無象、而して万物以て化す。(東海之極、水至而反。夏熱之下、化而為寒。故曰、天無形、而萬物以成。至精無象、而萬物以化。)(君守)

故に無形の天は有形の万物の根拠であり、陰陽を生み出し時間として認識される現象の根源である。

天の陰陽を生ずるや、寒暑燥湿、四時之化、万物の変、利為らざる莫く、害為らざる莫し。(天生陰陽、寒暑燥溼、四時之化、萬物之變、莫不為利、莫不為害。)(盡數)

ところが陰陽を生み出す天の内部には更に太一が位置づけられ、太一の展開が天の常体とされる。

太一は両儀を出し、両儀は陰陽を出す。陰陽は変化し、一上一下、合して章を成す。渾渾沌沌、離るれば則ち復た合し、合すれば則ち復た離る。是を天常と謂ふ。天地は車輪、終れば則ち復た始り、極まれば則ち復た反り、咸当らざる莫し。日月星辰、或は疾く或は徐にして、日月同じからざるも、以て其の行を尽す。四時は代りて興り、或は暑く或は寒く、或は短、或は長、或は柔、或は剛なり。万物の出づる所、太一に造られ、陰陽に化す。(太一出兩儀、兩儀出陰陽。陰陽變化、一上一下、合而成章。渾渾沌沌、離則復合、合則復離。是謂天常。天地車輪、終則復始、極則復反、莫不咸當。日月星辰、或疾或徐、日月不同、以盡其行。四時代興、或暑或寒、或

短或長、或柔或剛。萬物所出、造於太一、化於陰陽。）（大樂）

つまり太一が両儀を生み出しそれが陰陽を生むならば、天とは太一が両儀を生み出す事である。太一は道ともされる。

道なる者は、之を視れども見ず、之を聴けども聞かれず、状を為すべからず。不見の見、不聞の聞、無状の状を知る者有れば、則ち之を知るに幾し。道なる者は、至精なり。形を為すべからず、名を為すべからず。強ひて之が為に之を太一と謂ふ。（道也者、視之不見、聽之不聞、不可為狀。有知不見之見、不聞之聞、無狀之狀者、則幾於知之矣。道也者、至精也。不可為形、不可為名。彊為之謂之太一。）（大樂）

この道は『老子』の道である(注9)。更にこの道は先の君守篇の天と同様に至精とされるので、無形の天は太一であり道である。つまり『呂氏春秋』は『管子』の無形から有形に展開する道の展開という発想を下敷きに、天を無形の天と有形の天に分け、更に無形の天の中に太一を繋ぎとして『老子』に基く『管子』の道を挿入している(注10)。従って無形の天は、道家の道を包摂する。故に無形の天は天下の正(注11)とされる。更にこの天は『書経』周書鴻範の天である。

天の用は密、准有るも以て平にせず、繩有るも以て正さず。天の大は静、既に静にして又た寧。以て天下の正と為すべし。身は以て心を盛り、心は以て智を盛る。智や深く蔵せられ、実は窺ふを得る莫きか。鴻範に曰く、惟れ天、下民を陰騭す、と。之を陰にするは、之を発する所以なり。故に曰く、戸を出ずして天下を知り、牖を窺はずして天道を知る。其の出づるや彌々遠ければ、其の知るや彌々少し、と。（天之用密、有准不以平、有繩不以正。天之大靜、既靜而又寧。可以為天下正。身以盛心、心以盛智。智乎深藏、而實莫得窺乎。鴻範曰、惟天、陰騭下民。陰之者、所以發之也。故曰、不出於戶而知天下、不窺於牖而知天道。其出彌遠者、其知彌少。）（君守）

それは『老子』の天道(注12)を引用して解釈される根源の天である。つまり儒墨の根源とする天は道家の道とされる。故に天は道であると同時に信仰の極点で、『書経』にある皇天上帝とされ(注13)、又天の大本である天宗(注14)とされる。要するに『呂氏春秋』では無形の天は天宗で、道家の道で、儒墨の皇天上帝である。更に儒墨の天に対する信仰を取り込む為に天命と『管子』の道の展開

である天の時(注15)を連結させる。即ち、先ず天を祭るのは天が人には理由も分からず如何ともし難い命(注16)、即ち生死を支配する禍福を下す為であるとするが(注17)、天が下す禍福はほとんど禍であり(注18)、福の例は君主に生まれた事自体が天賞とする例(注19)だけである所からすると、万物を生み出す天の通常、生が福で、死に通じる変則が禍である。禍福には妖祥の予兆があり(注20)、人が招くとする。

商箴に云ふ、天の災を降し祥を布く、並びに其の職有り、と。以て禍福は人之を召く或るを言ふなり。（商箴云、天降災布祥、竝有其職。以言禍福人或召之也。）（應同）

これは天人相関思想であり、『呂氏春秋』はこの背後に時を置く事で、その説を吸収し儒墨の優位に立とうとする。つまり禍福は現象として展開する時の流れを人の生死の面から説明したとする。これは禍福を招く人の背後にも天があり、国の興亡も天の展開である万物の形成変化とされている事から明らかである。

凡そ治乱存亡、安危強弱は、必ず其の遇有り。然る後成るべく、各々一なれば則ち設あらず。故に桀紂は不肖と雖も、其の亡ぶや、湯武に遇へばなり。湯武に遇ふは、天なり。桀紂の不肖に非ず。（凡治亂存亡、安危強弱、必有其遇。然後可成、各一則不設。故桀紂雖不肖、其亡、遇湯武也。遇湯武、天也。非桀紂之不肖也。）（長攻）

要するに禍福とは万物の変化、時であり、それを下す無形の天は根源の擬人化であるとする事で道家の根源としての道の展開は儒墨の天が下す禍福であり、道を擬人化したのが無形の天だとする。

・天は、時を下し、地は、財を生ずるも、民と謀らず。（天、下時、地、生財、不與民謀。）（任地）

・凡そ事を挙ぐるは天数に逆ふ無く、必ず其の時に順ひ、乃ち其の類に因る。（凡舉事無逆天數、必順其時、乃因其類。）（仲秋紀）

この無形の天は有形の天からの類推であった。

民は天を知るに道とする無し。民は四時寒暑日月星辰の行を以て天を知る。（民無道知天。民以四時寒暑日月星辰之行知天。）（當賞）

有形の天とは、形有る天地の天であり(注21)、形が有るなら天は物である。物とは合して成り離れて生ずと次にある様に、生という現象の結果有ると認識される物である。つまり生とは物が生ずるという事で、物の発生変化が寒暑、昼夜であり、具体的分節として認識される。

天地は始有り。天は、微以て成り、地は、塞以て形

る。天地の合和するは、生の大経なり。寒暑日月昼夜あるを以て之を知り、殊形殊能異宜あるを以て之を説く。夫れ物は合して成り、離れて生ず。（天地有始。天、微以成、地、塞以形。天地合和、生之大經也。以寒暑日月晝夜知之、以殊形殊能異宜說之。夫物合而成、離而生。）（有始）

従って物である天は、無形の天、既に見た太一が展開し、陰陽が変化合体し分離独立して生じた測り得る対象となる。物としての有形の天は具体的広さ(注22)のある天極を中心に回転する現象であり(注23)、人が四時を知る根拠である。

夫れ天を審にする者、列星を察して四時を知るは、因なり。歴を推す者、視月行を視て晦朔を知るは、因なり。（夫審天者、察列星而知四時、因也。推歴者、視月行而知晦朔、因也。）（貴因）

更に天は地と気を合し、「天地の合和するは、生の大経なり。」（有始）とあった様に生命を分離し生み出す(注24)。形有る物としての天は地と共に大きさ多さの最大で且つ無為、無私とされる(注25)。だが無形の天の陰陽の変化として生み出された有形の天は、形である以上盛衰があり、それが既に見た天妖、天災といったずれを生ずる。

凡そ人物は、陰陽の化なり。陰陽は、天に造られて成る者なり。天は固り衰嗛廃伏有り、盛盈鮎息有り。人も亦た困窮屈匱有り、充実達遂有り。此れ皆天の容、物の理なり、然らざるを得ざるの数なり。（凡人物者、陰陽之化也。陰陽者、造乎天而成者也。天固有衰嗛廢伏、有盛盈鮎息。人亦有困窮屈匱、有充實達遂。此皆天之容、物理也、而不得不然之數也。）（知分）

しかし不規則性も有形の天のあり方で物の道理とされる。故に物は形がある点では同一でも具体的形は万物として異なる。

天地陰陽は革まらざるも、万物を成すや同じからず。（天地陰陽不革、而成萬物不同。）（執一）

更に有形の天地は宇宙と並列される。

得道の人―中略―精は、天地に充ちて竭きず、神は、宇宙を覆ひて望無し。（得道之人―中略―精、充天地而不竭、神、覆宇宙而無望。）（下賢）

宇は四方上下で、宙は往古今来とする注(注26)に従えば、有形の天地の外側には有に対する同次元の無形の空間と時間が有る事になり、天地は有無の有という限定的存在である。故に有形の天は物の変化で、時の結果である。有形の天は、天地として更に万物を生み出すが、天地万

物は「凡そ人物は、陰陽の化なり。」（凡人物者、陰陽之化也。）（知分）とある同じ物であるはずの人、それも一人の身と対置される。天地万物と身が大同だとするのは、完結し循環する生命現象として同格、つまり生という点で同格とされており、ここにも無形から有形に次元を下る発想が用いられる。

天地万物は、一人の身なり。此を之れ大同と謂ふ。衆は耳目鼻口なり、衆は五穀寒暑なり、此を之れ衆異と謂ふ。則ち万物備る。天は万物を斟り、聖人は覧て、以て其の類を観す。（天地萬物、一人之身也。此之謂大同。眾耳目鼻口也、眾五穀寒暑也、此之謂眾異。則萬物備也。天斟萬物、聖人覽焉、以觀其類。）（有始）

身と天地は情を共通項とし、身と天下に置き換えられる。

人と天地とは同じ。万物の形は異と雖も、其の情は一体なり。故に古の身と天下とを治むる者は、必ず天地に法る。（人與天地也同。萬物之形雖異、其情一體也。故古之治身與天下者、必法天地也。）（情欲）

天地に法るのは人であり、天地は天下として統治する物となる。

二、天下

天下は物だが、情は一体である。情とは大同の生である。

天下は、重物なるも以て其の生を害せず。又た況や它物に於けるをや。（天下、重物也而不以害其生。又況於它物乎。）（貴生）

だが大同とする以上、人の身も物である。身と天下を分けて治める主体は、物を治められる人である。

物を治むるは、物に於てせずして、人に於てす。（治物者、不於物、於人。）（貴當）

人は物の上位概念であり、従ってこの人とは身を身とし、物を物と認識する個々の己という意識を指す。人はここで己と置き換えられる。

先王の法を為る所以は人なり。而して己も亦た人なり。故に己を察すれば則ち以て人を知るべく、今を察すれば則ち以て古を知るべきは、古今一なり。人と我とは同じきのみ。（先王之所以為法者人也。而己亦人也。故察己則可以知人、察今則可以知古、古今一也。人與我同耳。）（察今）

つまり物と身の境界線は己であり、己の外側の天下と

いう物、「外物は必とすべからず。」（外物不可必。）（必己）とある外物と、内側の身という意識が人に共通する己という境界線で、それが人と天下を物と認識すると考えられる。従って身を治める人、即ち己の治める天下とは、他の人の己を含んだ己以外の物であり、天下が天下の人々とされる様に、人の意識の集合体を上位概念として持つ(注27)。天地と人が大同である以上、人も天地の根源の展開である。故に天下は全体として妥当な判断を下す認識主体とされる。

武王―中略―殷に親しむこと周の如くし、人を視るに己の如くす。天下其の徳を美し、万民其の義を説ぶ。故に立てて天子と為す。（武王―中略―親殷如周、視人如己。天下美其徳、萬民説其義。故立為天子。）（簡選）

天下とは万民と同義で理念的人概念に等しい。

天下は一人の天下に非ず、天下の天下なり。陰陽の和は、一類を長ぜず。甘露時雨は、一物を私せず。万民の主は、一人に阿らず。（天下非一人之天下也、天下之天下也。陰陽之和、不長一類。甘露時雨、不私一物。萬民之主、不阿一人。）（貴公）

故に天下は具体的一人の認識を超えた天下の天下であり、陰陽の和合の働きの様に無私であるとされる。だが無形の天と有形の天の関係の様に、天下も形として現れる以上変則があり、誅伐が必要とされる。

家に怒笞無くんば、則ち豎子嬰兒の過有るや立に見る。国に刑罰無くんば、則ち百姓の悟ひて相ひ侵すや立に見る。天下に誅伐無くんば、則ち諸侯の相ひ暴するや立に見る。故に怒笞は家に偃むべからず。刑罰は国に偃むべからず。誅伐は天下に偃むべからず。（家無怒笞、則豎子嬰兒之有過也立見。國無刑罰、則百姓之悟相侵也立見。天下無誅伐、則諸侯之相暴也立見。故怒笞不可偃於家。刑罰不可偃於國。誅伐不可偃於天下。）（蕩兵）

理念的には無私でも具体化すれば善悪が現れるのが物の分節であり、故に矯正が必要だと判断するのも太一の展開、陰陽の化とする。従って天下の要は分節を生み出す根本、生とされる。

聖人深く天下を慮るに、生より貴きは莫し、と。（聖人深慮天下、莫貴於生。）（貴生）

生とは「凡そ生ずるは、一気の化に非ず。長ずるは、一物の任に非ず。成るは、一形の功に非ず。」（凡生、非一氣之化也。長、非一物之任也。成、非一形之功也。）（明理）とある様に多種の気の変化であり、「類同じければ相ひ召き、気同じければ則ち合し、声比すれば則ち応

ず。」（類同相召、氣同則合、聲比則應。）（召類）とある様に、既に有始篇で見た合体し別の物として形づけられ分離独立する生の働きである。それは根源の太一から連続する流れで、陰陽の化、物の変化であった。故に生とは物を生み出す働きであり、貴生篇でも「天下、重物也。而不以害其生。又況於它物乎。」とされ物以上とされていたが、無限に生み出される物は、生み出される具体的物としては相対的である以上、無限に連続する生もその生としては、「凡そ天地の間に生ずる、其れ必ず死有り。」（凡生於天地之間、其必有死。）（節喪）と指摘される死に限定されながら、「死生は、命なり、苛病は失なり。」（死生、命也、苛病、失也。）（知接）とされる変更不能の命として展開する。命としての生死は性命とされる。

吾命を天より受け、力を竭して以て人を養ふ。生は、性なり。死は、命なり。余何ぞ龍を憂へん、と。（吾受命於天、竭力以養人。生、性也。死、命也。余何憂於龍焉。）（知分）

生は性である。性は欲を治め、欲は天子を治め、天子は君を治め、君は人を治め、人は物を治める万物の本が性である。

物を治むるは、物に於てせずして、人に於てす。人を治むるは、事に於てせずして、君に於てす。君を治むるは、君に於てせずして、天子に於てす。天子を治むるは、天子に於てせずして、欲に於てす。欲を治むるは、欲に於てせずして、性に於てす。性は万物の本なり。（治物者、不於物、於人。治人者、不於事、於君。治君者、不於君、於天子。治天子者、不於天子、於欲。治欲者、不於欲、於性。性者萬物之本也。）（貴當）

従って性とは形を形とする先天的限定であり、「性は天より受くる所なり。人の能く為す所に非ざるなり。」（性者所受於天也。非人之所能為也。）（蕩兵）とある様に人為を超えた変更不能のあり方である。

石は破るべきも堅を奪ふべからず。丹は磨くべきも赤を奪ふべからず。堅と赤とは、性の有なり。性なる者は、天より受くる所。択取して之を為すに非ざるなり。（石可破也而不可奪堅。丹可磨也而不可奪赤。堅與赤、性之有也。性也者、所受於天也。非擇取而為之也。）（誠廉）

変更不能の性には命と共に、「諸の能く治天下を治むる者、固り必ず性命の情に通ずるは、当に無私なるべくんばなり。」（諸能治天下者、固必通乎性命之情者、當無私矣。）（有度）とされる情がある。情とは「人與天地也

同。萬物之形雖異、其情一體也。」（情欲）とあった様に、形を形とする本質であり、人に在ってはその本音とされる。

内は則ち六戚四隠を用ひ、外則ち八観六験を用ふれば、人の情偽、貪鄙、美悪失ふ所無し。―中略―此れ聖王の人を知る所以なり。（内則用六戚四隠、外則用八觀六驗、人之情偽貪鄙美悪無所失矣。―中略―此聖王之所以知人也。）（論人）

人の情とは欲である。欲とは「人の情は、生を欲して死を悪み、栄を欲して辱を悪む。」（人情、欲生而悪死、欲榮而悪辱。）（論威）とある様に生の永続と拡大である。ところが欲にも「天は人を生み貪有り欲有りらしむ。欲に情有り、情に節有り。」（天生人而使有貪有欲。欲有情、情有節。）（情欲）とある様に情があり情の中には節が有る。節とは生の欲を制する意識である。つまり性は生、生は欲、欲は情に支配され情は節に支配される。

夫れ耳目鼻口は、生の役なり。耳は声を欲すと雖も、目は色を欲すと雖も、鼻は芬香を欲すと雖も、口は滋味を欲すと雖も、生に害あれば則ち止む。―中略―此に由りて之を観れば、耳目鼻口は、擅行するを得ず、必ず制する所有り。之を譬ふれば官職の擅為するを得ず、必ず制する所有るが若し。此れ貴生の術なり。（夫耳目鼻口、生之役也。耳雖欲聲、目雖欲色、鼻雖欲芬香、口雖欲滋味、害於生則止。―中略―由此觀之、耳目鼻口、不得擅行、必有所制。譬之若官職不得擅為、必有所制。此貴生之術也。）（貴生）

耳目は生に使役され欲に従うが、制する所があるというのが節である。つまり性命の情を節する意識が先天的に備わる。

諸の能く天下を治むる者、固り必ず性命の情に通ずるは、当に無私なるべくんばなり。夏に裘を衣ざるは、裘を愛むに非ず、暖に餘有ればなり。―中略―聖人の私を為さざるや、費を愛むに非ず。己を節すればなり。己を節すれば、貪汙の心と雖も猶若ほ止む。又た況や聖人をや。（諸能治天下者、固必通乎性命之情者、當無私矣。夏不衣裘、非愛裘也、暖有餘也。―中略―聖人之不為私也、非愛費也。節乎己也。節己、雖貪汙之心猶若止。又況乎聖人。）（有度）

そして性命の情に通ずれば天下を治められるが、その条件は無私で経験的な己の意識に左右されない聖人の意識、即ち己を節する意識を己の核とする事である。故に

節とはそれ自体相対化できない人の認識判断の核で生の本質である。つまり生きているとは、「所謂死とは、知る所以有る無く、其の未生に復すなり。」（所謂死者、無有所以知、復其未生也。）（貴生）とある死の対極で認識する意識がある事である。要するに、

人は其の生を以て生きざる莫きも、其の生きる所以を知らず。人は其の知を以て知らざる莫きも、其の知る所以を知らず。（人莫不以其生生、而不知其所以生。人莫不以其知知、而不知其所以知。）（侈樂）

とある様に生きていると知る事は誰でも分かるが、何故生きて知るのかは誰にも分からないが、それが前提で生きていると知るならば、知る所以、認識する意識が生の根本だという事である。この生を生とする太一から連続する気の流れが主体として物を生み出し、物を扱う人を生み出し、人を人とし己を己とし、物を物と認識する故に生が天下の本とされ、故に性命の情に通ずれば天下を治められるのである。

以上が一人の身が天地万物と同等とする理由である。故に天下は身を扱う事で治められる己の対象物である。

三、我

昔、先聖王は、其の身を成して天下成り、其の身を治めて天下治る。故に善く響する者は響に於いてせずして、声に於いてす。善く影する者は影に於いてせずして、形に於いてす。天下を為むる者は、天下に於いてせずして、身に於いてす。（昔者、先聖王、成其身而天下成、治其身而天下治。故善響者不於響、於聲。善影者不於影、於形。為天下者、不於天下、於身。）（先己）

身を成せば天下が成るとは、生み出された身を持つ己が生み出した天下を治められるという事だが、それは身が太一の具体的展開として他の物から独立して関係中に生じているからである。つまり太一が身にあるという自覚が己の自覚であり、道の自覚である。

必ず先づ道を知る。道は彼に亡く、己に在り。己成りて天子成る。天子成れば則ち至味具る。故に近きを審にするは遠きを知る所以なり、己を成すは、人を成す所以なり。聖人の道は要あり。豈に越越として多業ならんや。（必先知道。道者亡彼、在己。己成而天子成。天子成則至味具。故審近所以知遠也、

成己、所以成人也。聖人之道要矣。豈越越多業哉。）
（本味）

独立した身を己とする己は、道の限定的展開である故に身を支配できるが、その己は我身が有る事による。故に己には身が天下以上とされる。

今吾が生の我が有為る、我を利すること亦た大なり。其の貴賤を論じ、爵は天子為りとするも、以て比するに足らず。其の軽重を論じ、富は天下を有すとするも、以て之に易ふべからず。其の安危を論じ、一曙に之を失はば、終身復た得ず。此の三者は有道者の慎む所なり。（今吾生之為我有、而利我亦大矣。論其貴賤、爵為天子、不足以比焉。論其輕重、富有天下、不可以易之。論其安危、一曙失之、終身不復得。此三者有道者之所慎也。）（重己）

外物以上の生には、独立した身である以上必ず我生という意識がある。この意識が己とする我は肉体であり（注28）、身を外物以上の物とする己の自覚はその主体である。

倕は、至巧なるも、人は倕の指を愛せずして、己の指を愛するは、之が利を有するが故なり。人は崑山之玉、江漢の珠を愛せずして、己の一蒼璧小璣を愛するは、之が利を有するが故なり。今吾が生の我が有為る、我を利すること亦た大なり。（倕、至巧也、人不愛倕之指、而愛己之指、有之利故也。人不愛崑山之玉、江漢之珠、而愛己一蒼璧小璣、有之利故也。今吾生之為我有、而利我亦大矣。）（重己）

この様に己は人の根拠である。故に天命を受けた聖人の吾とはその自覚、つまり己の相対化である。

禹、天を仰視して歎じて曰く、吾、命を天より受け、力を竭し以て人を養ふ。生は、性なり。死は、命なり。余、何ぞ龍を憂へん、と。―中略―命なる者は、然る所以を知らずして然る者なり。人智巧を事として以て舉錯する者は与るを得ず。（禹仰視天而歎曰、吾受命於天、竭力以養人。生、性也。死、命也。余何憂於龍焉。―中略―命也者、不知所以然而然者也。人事智巧以舉錯者不得與焉。）（知分）

だが自覚如何に関わらず、人の基準が己とされるのは、人には必ず己の内に性、即ち道があるからである。性は万物の本なり。長くすべからず、短くすべからず。其の固り然るに因りて之を然りとす。此れ天地の数なり。―中略―湯武は其の行を修めて天下従ひ、桀紂は其の行を慢にして天下畔く。豈に其の言を待たんや。君子は己に在る者を審にするのみ。（性者萬物之本也。不可長、不可短。因其固然而然

之。此天地之數也。―中略―湯武修其行而天下從、桀紂慢其行而天下畔。豈待其言哉。君子審在己者而已矣。）（貴當）

故に人は、「人の情、己に同じき者を愛し、己に同じき者を誉め、己に同じき者を助く。」（人之情、愛同於己者、譽同於己者、助同於己者。）（誣徒）とある様に必ず己を基準に判断する。この様なあり方が人の前提であればこそ、性命の情そのものの己として人に対すれば天下に評価され天子となる。

武王―中略―殷に親しむこと周の如くし、人を視るに己の如くす。天下其の徳を美し、万民其の義を説ぶ。故に立てて天子と為す。（武王―中略―親殷如周、視人如己。天下美其徳、萬民説其義。故立為天子。）（簡選）

これが既に「天下、重物也。而不以害其生。又況於它物乎。」（貴生）とあった天下よりその生、即ち我生を重視するその己であり、「惟だ天下を以て其の生を害せざる者、以て天下を託すべし。」（惟不以天下害其生者也、可以託天下。）（貴生）とある天下を託す聖人の己である。つまり己の根源である生を己に自覚する事が天下を統治する者の条件であり、天下とは己と同格とされる故に己から類推が可能なのである。

丘之を聞く、之を身に得る者は、之を人に得。之を身に失ふ者は、之を人に失ふ。門戸を出でずして天下治まるとは、其れ唯だ己の身に反るを知る者か、と。（丘聞之、得之於身者、得之人。失之於身者、失之人。不出於門戸而天下治者、其唯知反於己身者乎。）（先己）

天下が己の類推から知り得るとする立場は、『老子』(注29)を取り込みながら天下を知り天道を見る主体として己を道の上に立てる立場である。

主の道は約にして、君の守りは近し。太上は諸を己に反し、其の次は諸を人に求む。其の之を索むること彌々遠き者は、其の之を推すこと彌々疏し。其の之を求むること彌々強き者は、之を失ふこと彌々遠し。（主道約、君守近。太上反諸己、其次求諸人。其索之彌遠者、其推之彌疏。其求之彌疆者、失之彌遠。）（論人）

これは太上概念に己を結び付け、道の上に己を立て根拠とする事で道家の道を包摂したものである。故に太上とは己の内に求めるべき知の根源とされる。

夫れ堯は悪にか賢を天下に得て舜を試す。舜は悪にか賢を天下に得て禹を試す。之を耳に断ずるのみ。耳の以て断ずべき、性命の情に反るなり。―中略―

太上は之を知り、其の次は其の知らざるを知る。知らざれば則ち問ひ、能はざれば則ち学ぶ。周箴に曰く、夫れ自ら斯に念へば、徳を学ぶこと未だ暮からず、と。賢に学びて問ふは、三代の昌なる所以なり。（夫堯悪得賢天下而試舜。舜悪得賢天下而試禹。斷之於耳而已矣。耳之可以斷也、反性命之情也。―中略―太上知之、其次知其不知。不知則問、不能則學。周箴曰、夫自念斯、學德未暮。學賢問、三代之所以昌也。）（謹聽）

堯が舜を聖人と判断したのも堯が己で判断したのであり、その判断の根拠が性命の情である。己に反るとは性命の情に反る事ならば、「太上は之を知る」とは己とは性命の情そのものだと知る事である。つまりこれは己が知らない事を知るという自己相対化の果てに到達するべき立場であり、それが知の根源、判断基準だという事である。己が絶対的基準であるのは思考する事自体が存在根拠だという事である。従って、己に在る思考自体が最終的に判断を下す根拠となる。

君子の自ら行ふや、人を敬するも敬せらるるを必とせず、人を愛するも愛せらるるを必とせず。人を敬愛する者は、己なり。敬愛せらるる者は、人なり。君子は己に在る者を必とし、人に在る者を必とせず。己に在るを必とせば、遇はざる無し。（君子之自行也、敬人而不必見敬、愛人而不必見愛。敬愛人者、己也。見敬愛者、人也。君子必在己者、不必在人者也。必在己、無不遇矣。）（必己）

己に在るものとは性命の情、太一であり、太上とはこれが本来の我だとする意識である。この己の意識は身から外物へと拡大し、公私概念をも包摂する。

嘗て試に上古記を観るに、三王の佐、其の名栄ならざる無く者、其の実安からざる無きは、功大なればなり。詩に云ふ、晻たる有りて凄凄、雲を興すこと祁祁、我が公田に雨ふり、遂に我が私に及ぶ、と。（嘗試觀上古記、三王之佐、其名無不榮者、其實無不安者、功大也。詩云、有晻淒淒、興雲祁祁、雨我公田、遂及我私。）（務本）

己の意識とは無限に拡大可能な国にまで及ぶ生の意識である。

臣の言を聴かば、国は必ず広大、身は必ず安楽ならん。是れ生きて又た生くるなり。臣の言を聴かざれば、国は必ず滅亡、身は必ず危辱あらん。是れ死して又た死するなり。（聽臣之言、國必廣大、身必安樂。是生而又生也。不聽臣之言、國必滅亡、身必危辱。是死而又死也。）（貴信）

又己の意識は天下との境界線(注30)でもある。従って己の意識が天下にまで拡大すれば王者という事になる。東西南北上下の内側がすべて己の府、己の有とするのは己の意識が外物を包摂した状態である。

信立たば則ち虚言以て賞すべし。虚言以て賞すべくんば、則ち六合の内、皆己の府為り。信の及ぶ所、尽く之を制す。之を制するも用ひざれば、人の有なり。之を制して之を用ふれば、己の有なり。己之を有さば、則ち天地の物畢く用を為す。人主此の論を見る者有らば、其の王たる久しからず。(信立則虚言可以賞矣。虚言可以賞、則六合之内皆為己府矣。信之所及、盡制之矣。制之而不用、人之有也。制之而用之、己之有也。己有之、則天地之物畢為用矣。人主有見此論者、其王不久矣。)(貴信)

己の意識は形のすべてである時間と空間、宇宙に及ぶ。

故に曰く、身を以て家を為め、家を以て国を為め、国を以て天下を為む。此の四者は、位を異にするも本を同じくす。故に聖人の事、之を広くすれば則ち宇宙を極め、日月を窮む。之を約すれば則ち身を出る者無きなり。(故曰、以身為家、以家為國、以國為天下。此四者、異位同本。故聖人之事、廣之則極宇宙、窮日月。約之則無出乎身者也。)(執一)

この己の意識は性に基くが、性は己の中の天とされる。

四、我の中の天

次の資料の天は人の外側の天ではなく、人の中にある天である。

何をか諸を己に反すと謂ふ。耳目を適はしめ、嗜欲を節し、智謀を釈て、巧故を去りて、意を無窮の次に游ばせ、心を自然の塗に事へしむ。此の若くんば則ち以て其の天を害する無し。以て其の天を害する無くんば則ち精を知る。精を知らば則ち神を知る。神を知るを之れ一を得ると謂ふ。(何謂反諸己也。適耳目、節嗜欲、釋智謀、去巧故、而游意乎無窮之次、事心乎自然之塗。若此則無以害其天矣。無以害其天則知精。知精則知神。知神之謂得一。)(論人)

己の中の天は己の知の根拠であり、我が一を得る条件である。得るとは知ると置き換えられる。すると根源である一を得るとは、認識を生み出す働きが本来の我であると知る事になる。その働きとは既に述べた生である。

生なる者は、其の身固り静にして、或は而ち後に知

り、或は之を使ふ。遂げて返らざれば、嗜欲に制せらる。嗜欲に制せらるること無窮なれば則ち必ず其の天を失ふ。（生也者、其身固靜、或而後知、或使之也。遂而不返、制乎嗜欲。制乎嗜欲無窮則必失其天矣。）（侈樂）

生が欲に覆われれば天を失うとは、欲が経験により錯覚を起し、認識主体が本来のあり方を失う事である。これは無形有形の天の発想と同様に具体的なものにはずれがあるという事であり、従って与えられた具体的生を養い全くした者、本来のあり方に到達した者が全天、全生する王者としての天子とされる。

始めて之を生ずる者は、天なり。之を養成する者は、人なり。能く天の生ずる所を養ひて之に攖るなきを天子と謂ふ。天子の動くや、天を全くするを以て故と為す者也。此れ官の自りて立つ所なり。官を立つるは、生を全くするを以てなり。（始生之者、天也。養成之者、人也。能養天之所生而勿攖之謂天子。天子之動也、以全天為故者也。此官之所自立也。立官者、以全生也。）（本生）

天はここで人と対比されるが、天は所以生、人は生であり、生み出した形而上的天と生み出された具体的生である人の対比に等しい。従って天子は具現化するべき理念的人格である。故にその様なあり方をする者は聖人とされる。

万人弓を操り共に一招を射ば、招中らざる無し。万物は章章たり。以て一生を害すれば、生傷なはれざる無く、以て一生に便ならしむれば、生長ぜざる無し。故に聖人の万物を制するや、其の天を全くするを以てす。天全ければ則ち神は和し、目は明、耳は聰、鼻は臭、口は敏にして、三百六十節皆利に通ず。（萬人操弓共射一招、招無不中。萬物章章。以害一生、生無不傷、以便一生、生無不長。故聖人之制萬物也、以全其天也。天全則神和矣、目明矣、耳聰矣、鼻臭矣、口敏矣、三百六十節皆通利矣。）（本生）

聖人が用いる全天とは全性であり、性命の情、天性に達する事である。

且つ天の人を生ずるや、而ち其の耳をして以て聞くべからしむるも、学ばざれば、其の聞聾に若かず。其の目をして以て見るべからしむるも、学ばざれば、其の見盲に若かず。其の口をして以て言ふべからしむるも、学ばざれば、其の言爽に若かず。其の心をして以て知るべからしむるも、学ばざれば、其の知狂に若かず。故に凡そ学は、能く益すに非ず、

天性に達するなり。能く天の生ずる所を全くして之を敗る勿き、是を善学と謂ふ。（且天生人也、而使其耳可以聞、不學、其聞不若聾。使其目可以見、不學、其見不若盲。使其口可以言、不學、其言不若爽。使其心可以知、不學、其知不若狂。故凡學、非能益也、達天性也。能全天之所生而勿敗之、是謂善學。）（尊師）

天性に達するとは、己が与えられた時、天年を全くする事である。

凡そ事の本は、必ず先づ身を治め、其の大宝を嗇む。其の新を用ひ、其の陳を棄つれば、腠理遂に通ず。精気日々に新にして、邪気尽く去る。其の天年に及べば、此を之れ真人と謂ふ。（凡事之本、必先治身、嗇其大寶。用其新、棄其陳、腠理遂通。精氣日新、邪氣盡去。及其天年、此之謂真人。）（先己）

天年を全くするとは、生の永続と安定だが、人は生を全くする為に逆に生を損なう闘争する力を性として与えられている。

凡そ兵なる者は威なり。威なる者は力なり。民の威力有るは、性なり。性は天より受くる所。人の能く為す所に非ず。（凡兵也者威也。威也者力也。民之有威力、性也。性者所受於天也。非人之所能為也。）（蕩兵）

天年を全くし天性に達しようとするのが欲で性なら、逆は悪だがそれも性である。

始めて人を生ずる者は天なり、人事とする無し。天人をして欲する有らしむ、人求めざるを得ず。天人をして悪む有らしむ。人辟けざるを得ず。欲と悪とは天より受くる所なり。人与るを得ず、変ずべからず、易ふべからず。（始生人者天也。人無事焉。天使人有欲。人弗得不求。天使人有悪。人弗得不辟。欲與悪所受於天也。人不得與焉、不可變、不可易。）（大樂）

欲と悪は生の外物に対する展開であり、天性として人を規定する。存在の相対性による絶対への願望が天地の循環の様に現象し、人は闘争を繰り返す。それが生であり命である。従って天地陰陽に法則がある様に欲を節する意識、「天人を生じ貪有り欲有らしむ。欲に情有り、情に節有り。」（天生人而使有貪有欲。欲有情、情有節。）（情欲）とある節を義として与えられているとする。

天の民を生ずるや而ち別有らしむ。別有るは、人の義なり。禽獣麋鹿に異なる所なり。君臣上下の立つ所以なり。（天生民而令有別。有別、人之義也。所異於禽獸麋鹿也。君臣上下之所以立也。）（先識）

そして欲悪する性を「性は万物の本なり。長くすべからず、短くすべからず。其の固り然るに因りて之を然りとす。此れ天地の数なり。」（性者萬物之本也。不可長、不可短。因其固然而然之。此天地之數也。）（貴當）として天地の数、物の存在の法則と見なす。

故に人はその天を全くする為に己を拡大しようと闘争し、知る所以、節度を理解する意識に従ってその天に順い長を立て、君を立て、天子を立てる。

未だ蚩尤有らざるの時、民固り林木を剥ぎて以て戦ふ。勝者は長と為る。長は則ち猶ほ之を治むるに足らず。故に君を立つ。君又た以て之を治むるに足らず。故に天子を立つ。天子の立つや君より出づ。君の立つや長より出づ。長の立つや争より出づ。争闘の自りて来る所の者は久し。禁ずべからず、止むべからず。（未有蚩尤之時、民固剝林木以戰矣。勝者為長。長則猶不足治之。故立君。君又不足以治之。故立天子。天子之立也出於君。君之立也出於長。長之立也出於爭。爭鬬之所自來者久矣。不可禁、不可止。）（蕩兵）

ところが人は無限の欲望を調整するはずの性、天に逆らう場合がある。

善く上為る者は、能く人をして欲を得ること無窮ならしむ。故に人の用を得べきも亦た無窮なり。蠻夷反舌、殊俗異習の国も、―中略―其の欲の使と為るは、一なり。三王も革むる能はず、革むる能はずして功成る者は、其の天に順へばなり。桀紂も離す能はず、離す能はずして国亡ぶ者は、其の天に逆へばなり。逆ふも其の逆ふを知らざるは、俗に湛ればなり。久しく湛りて去らざれば則ち性の若し。性は、性に非ざるに異なるも、熟せざるべからず。（善為上者、能令人得欲無窮。故人之可得用亦無窮也。蠻夷反舌、殊俗異習之國、―中略―其為欲使、一也。三王不能革、不能革而功成者、順其天也。桀紂不能離、不能離而國亡者、逆其天也。逆而不知其逆也、湛於俗也。久湛而不去則若性。性、異非性、不可不熟。）（為欲）

人の欲望は天で性だとすれば、天に順うのも逆らうのも具体的己の差であるが、それも天に与えられたものである。その具体的己は天符とされる。

孔子温伯雪子を見る。言はずして出づ。子貢曰く、夫子の温伯雪子を見んと欲するや好し。今や之を見るも言はず。其の故は何ぞや、と。孔子曰く、夫の人の若きは、目擊して道存す。以て声を容るべからず。故に未だ其の人を見ずして其の志を知り、其の

人を見て心と志と皆見ゆるは、天符同じければなり。聖人の相ひ知るや、豈に言を待たんや、と。（孔子見溫伯雪子。不言而出。子貢曰、夫子之欲見溫伯雪子好矣。今也見之而不言。其故何也。孔子曰、若夫人者、目擊而道存矣。不可以容聲矣。故未見其人而知其志、見其人而心與志皆見、天符同也。聖人之相知、豈待言哉。）（精諭）

天符は人の心と志を傾向づける天の符号であり、その人の己だが、天符であるなら先天的であり、神農、堯舜も天符の現れとされる。つまり聖人は先天的に聖人として生み出されているのであり、その己を天符としているのである。

故に子華子曰く、厚くして博からず、敬みて一事を守り、性を正すをを是れ喜ぶ。群衆は周からざるも、一能を成すに務む。能を尽し既に成れば、四夷乃ち平なり。唯だ彼の天符、周からずして周し。此れ神農の長ずる所以にして、堯舜の章なる所以なり。（故子華子曰、厚而不博、敬守一事、正性是喜。群衆不周、而務成一能。盡能既成、四夷乃平。唯彼天符、不周而周。此神農之所以長、而堯舜之所以章也。）（知度）

天符は聖人としての己の符であり、己の現実対応能力である。群衆は一面的な能力があるが、聖人はそれらを価値づけ人全体を管理する判断基準を先天的に持つ。要するに人にはこの天符の有る者と無い者が存在する。

客季子に問ふ有りて曰く、奚を以て舜の能を知る、と。季子曰く、堯固り已に天下を治む。舜は天下を治むるを言ひて己の符に合す、是を以て其の能を知る、と。（客有問季子曰、奚以知舜之能也。季子曰、堯固已治天下矣。舜言治天下而合己之符、是以知其能也。）（有度）

己の符は天の与えた材ともされる。

故に聖人の事、―中略―慈親も子に伝ふる能はず、忠臣も君に入るる能はず、唯だ其の材有る者のみ之に近づくを為す。（故聖人之事、―中略―慈親不能傳於子、忠臣不能入於君、唯有其材者為近之。）（執一）

つまり己も万物同様等差を以て具体的に生み出される。故にその己を中心に闘争するのも性、天による。人が争うのは天の常であるなら、天符の有る聖人と無い者の視点は異なる以上争う事になり、戦うのも天命である。戦いには勝敗がある。故に聖人は通常の人を人としている根源の天に勝たねばならない。

昔、先聖王は、―中略―故に其の道に反れば身善

し。義を行へば則ち人善し。君道を備ふるを楽しまば、而ち百官已に治り、万民已に利あり。三者の成るや、無為に在り。無為の道を天に勝つと曰ひ、義を身を利すると曰ひ、君を身とする勿しと曰ふ。身とする勿くんば、督しく聴く。身を利すれば、平静なり。天に勝たば、性に順ふ。性に順はば則ち聰明にして壽長し。平静なれば則ち業進み郷ふを楽む。督しく聴かば則ち姦塞がれて皇はず。（昔者先聖王、―中略―故反其道而身善矣。行義則人善矣。樂備君道、而百官已治矣、萬民已利矣。三者之成也、在於無為。無為之道曰勝天、義曰利身、君曰勿身。勿身、督聽。利身、平靜。勝天、順性。順性則聰明壽長。平靜則業進樂鄉。督聽則姦塞不皇。）（先己）

聖王が身を治め天下が治る条件は無為の道に反る事に在り、それが天に勝つ事とされる。天に勝つとは、性に順う在り方に至る事とされる。要するに天符を与えられた聖人が己の内なる性命の情に達し、身、国と拡大し、己を天下と同じくする事であり、結果己の外なる天、即ち天下、つまり時と人に勝つという訳である。この様な己の拡大が無為の道なら、天に勝つとは太一の具現化であり、己とは太一だとする事である。

是の故に聖王の徳は、融乎として月の始めて出づるが若く、六合を極燭而して窮屈する所無し。昭乎として日の光の若く、万物を変化して行かざる所無し。神は、太一に合し、生は屈する所無く、意は障ぐべからず。精は、鬼神に通じ、深微玄妙、其の形を見る莫し。（是故聖王之德、融乎若月之始出、極燭六合而無所窮屈。昭乎若日之光、變化萬物而無所不行。神、合乎太一、生無所屈、而意不可障。精、通乎鬼神、深微玄妙、而莫見其形。）（勿躬）

聖王の徳が拡大し、精神が太一に一体化して鬼神に通ずるのも太一の展開である。故に太一が己だという自覚は、天地万物は一人の身なりとする己であり、太一本体を本体と位置づける己は現象としての外なる天を太一自体として意識化する、それが天に勝つ事なのである。天に勝たねば天が生み出した人を不義として討つ資格はない。

夫れ攻伐の事、未だ無道を攻めずして不義を罰す有らず。無道を攻めて不義を伐たば、則ち福焉より大なるは莫く、黔首の利焉より厚きは莫し。之を禁ずるは、是れ有道を息め有義を伐つなり。（夫攻伐之事、未有不攻無道而罰不義也。攻無道而伐不義、則福莫大焉、黔首利莫厚焉。禁之者、是息有道而伐有義也。）（振亂）

『呂氏春秋』は義兵説を取る(注31)が、その生殺与奪の権の前提がこの天の展開である。それは周室滅んで天子既に断たれた天の時に生み出されたものであった。

今周室既に滅び、天子已に絶たる。乱は天子無きより大なるは莫し。天子無くんば則ち強き者弱に勝ち、衆き者寡に暴し、兵を以て相ひ残ひ、休息するを得ず。今の世は之に当る。(今周室既滅、而天子已絶。亂莫大於無天子。無天子則彊者勝弱、眾者暴寡、以兵相殘、不得休息。今之世當之矣。)(謹聽)

おわりに

本論は『呂氏春秋』に於ける天の展開が『管子』の道の展開を下敷きに、荀子学派の天人の分を無力化する為に人の中に天を立て天を連続させ、天に代表される諸家の根源とするものをすべて太一とし、その展開が己だとする事でその背後に立ち、太一一元論に由る己を国家の核として提示し、生殺与奪の権の根拠とする事でその立場を確立し六国に対抗しようとした国家体制論の前提である事を論じた。つまり雑家とは儒墨名法の所説を兼ね合わせ国家体制を形成する総合政策学派(注32)であり、己という枠組みを持つ国体論を展開したものだったと考えられる。

注

(1)「雑家者流、蓋出於議官。兼儒墨、合名法、知國體之有此、見王治之無不貫、此其所長也。及澾者為之、則漫羨而無所歸心。」(『漢書藝文志』)

(2)『史記』呂不韋列傳及び『呂氏春秋』序意篇参照

(3) 武内義雄『諸子概説』(東京弘文堂一九三五年『武内義雄全集』巻七所収126、128頁一九七九年)

(4) 赤塚忠「呂氏春秋の思想史的意義」(『日本中国学会報』八3、11頁一九五六年)

(5) 町田三郎「『管子』と『呂氏春秋』」(『中国哲学論集』七11頁一九八一年)
同氏『中国の古典 呂氏春秋』(講談社一九八七年同書講談社学術文庫版「解説」326頁二〇〇五年)

(6) 浅野裕一「『呂氏春秋』と天人相関思想(上)—編集意図探求の一環として—」(『呂氏春秋研究』四22頁一九九〇年)

(7) 拙論「『管子』の「道」について」(『中国研究集刊』53号二〇一一年)
同「管子の聖人」(『集刊東洋学』106号二〇一一年)

(8) テキストは四部叢刊本を底本とし、許維遹『呂氏春秋集釈』、

陳奇猷『呂氏春秋校釈』等を参照して校訂したものを用いた。

（9）『老子』14章、35章

（10）『管子』の方策や道路といった具体的形やことばで示される有形の道の前提である形而上の道概念は、「不見其形、不聞其聲、而序其成。謂之道。」（『管子』内業）、又「虚無無形、謂之道。化育萬物、謂之德。」（『管子』心術上）とある様に、『老子』の「有物昆成、先天地生。寂呵寥呵、獨立而不改、可以為天地母。吾未知其名、字之曰道。吾強為之名曰大。」（『老子』25章）とある道を前提にしたものである。『呂氏春秋』がこの様な管子を意識して編集された事は、時令説の形式ばかりでなく、その思想的特徴を示す概念を下敷きにした部分が見られる点からも推測できる。『管子』に特徴的な概念とは、金谷治『心の中の心―中国古代心理説の展開―』（追手門学院大学二十周年記念論集　文学部篇一九八七年）『金谷治中国思想論集』（上巻所収一九九七年平河出版社）が既に指摘する「心之中又有心焉。」（『管子』内業）とある文で、心がことばを無限に分節するという思考（詳細は注（7）拙論27頁）だが、『呂氏春秋』には「辭之中又有辭焉、心之謂也。」（淫辭）という『管子』の文の焼き直しという他ない文がある。又『管子』に於ける聖人の中核的能力は、斉の桓公と管仲の会話に有る東郭牙（東郭郵）の見えないものを概念化して示す能力（「聖人先知無形。」『管子』小問）だが、『呂氏春秋』はこの説話をそのまま引用し、焼き直しの説明（「聖人聽於無聲、視於無形。」重言）を加える。

（11）『老子』45章

（12）『老子』47章

（13）「凡在天下九州之民者、無不咸獻其力、以供皇天上帝社稷寢廟山林名川之祀。」（季冬紀）

（14）「天子乃祈來年于天宗。」（孟冬紀）

（15）『管子』では道が天地を生み、天は道の展開である時とされる。「道生天地、德出賢人。道生德、德生正、正生事。」（『管子』四時）「時者得天、義者得人。既時且義。故能得天與人。」（『管子』樞言）

（16）禹仰視天而歎曰、吾受命於天、竭力以養人。生、性也。死、命也。余何憂於龍焉。―中略―命也者、不知所以然而然者也。人事智巧以舉錯者不得與焉。（知分）

（17）「桀迷惑於末嬉、―中略―民心積怨。皆曰、上天弗恤、夏命其卒。」（慎大）又「禍福之所自來、眾人以為命。安知其所。」（應同）とある。

（18）「天殃」（孟春紀）「天之所禍」（重己）「天之所誅」（懐寵）「天菑」（審時）「天罰」（制樂）

（19）「天賞」（明理）

（20）「天之見妖也」（制樂）「天必先見祥乎下民。」（應同）

（21）「解在乎天地之所以形。」（有始）

(22)「天有九野。地有九州。」(有始)

(23)「凡四極之內、東西五億有九萬七千里、南北亦五億有九萬七千里。極星與天俱游、而天極不移。」(有始)「當樞之下無晝夜。白民之南、建木之下、日中無影、呼而無響、蓋天地之中也。」(有始)

(24)「是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木繁動。王布農事。」(孟春紀)

(25)「天地至大矣、至衆矣。將奚不有為也。而無以為。為矣而無以為之。」(異寶)「天無私覆也。地無私載也。日月無私燭也。四時無私行也。行其德、而萬物得遂長焉。」(去私)

(26)「四方上下曰宇。」「往古來今曰宙。」(下賢篇高誘注)

(27)「殷湯即位。夏為無道、暴虐萬民、侵削諸侯、不用軌度。天下患之。」(古樂)

(28)「齊之好勇者、――中略――一人曰、子肉也。我肉也。」(當務)

(29) 注(12) 又『老子』17章

(30)「昌國君將五國之兵以攻齊。齊使觸子將、以迎天下之兵於濟上。」(權勳)とあり、斉の国が天下の兵と対峙するとある様に、我が斉の外側が天下とされる。

(31) 湯浅邦弘「『呂氏春秋』の義兵説――『墨子』『司馬法』との対比――」(島根大学教育学部紀要(人文・社会) 25巻一九九一年)

(32) 注(1)